第71回（R5．11）

「イモ侍＆イモ姉（ねえ）」奮戦記

６年前のある日のことである。「なーんと、**高齢者クラブも高齢化した**もんだけん、今年からイモ作りは、やめにしますわ」役員さんの言葉に笑いのツボをくすぐられたが、笑ってはいられない。高齢者クラブは、それまで学園橋近くでイモを育て、秋の文化祭で格安販売するのが恒例となっていた。イモ販売は文化祭の人気イベントであり、中止は多くの人々の期待を裏切ることになる。

今年からイモ販売がなくなる！それを聞いた数名の男女がこのイモ作りを引き継ぐと名乗り出た。私は彼らのことを秘かに「イモ侍イモ姉」と呼んだ。それから6年、今では地域の人々はもとより幼稚園、学童クラブの先生や子ども達、国際交流員、フリースクールの生徒さんなど多彩なメンバーが参加。「イモ侍とイモ姉」の指導もと、春の植え付けから秋の収穫に至るまで和気あいあいと作業を進めている。参加のご褒美はもちろん自分たちで育てたイモである。

今年も文化祭当日、イモ売場には長蛇の列ができた。軽トラ3杯分の紅はるか紅あずまは、あっという間に売り切れた。秋が深まり落ち葉が降り積もる頃、「イモ侍とイモ姉」は、川津幼稚園で焼き芋パーティを開く。焚火を囲んで「おいしくなーれ、おいしくなーれ」と、園児や国際交流員と一緒に呪文を唱える。焼きあがる間、園児たちは歌や踊りを披露する。何とも心温まる収穫祭である。

このイモ作り、様々な年代の人が土にまみれながら交流を深めている。今では朝酌川フラワープロジェクトに並ぶ、公民館の2大交流事業に成長した。その陰に「イモ侍とイモ姉」の、謙虚の衣をまとった、ひたむきな情熱があったことは、言うまでもない。